

心に響く

99
の言葉

東
洋の風韻

興福寺貫首

多川俊映

俊映



こころ ひび ことば
心に響く 99 の言葉

た がわ しゅんえい
多川 俊映

学研M文庫

2013年5月28日 初版発行



発行人——脇谷典利

発行所——株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元——株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

© Shunei Tagawa 2013 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは——編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター「心に響く99の言葉」係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。

Tel 03-6431-1002 (学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター TEL 03-3401-2382

<http://www.jrrc.or.jp> E-mail: jrrc_info@jrrc.or.jp

Ⓒ 〈日本複製権センター委託出版物〉

心に響く99の言葉 目次

はじめに

〇〇三

こころを育む

1 冥の照覧 みようのしょうらん

見えないものを、見る 〇一八

2 不楽本座 本座を楽しまず

今の状況を大切に 〇二〇

3 迷花言不帰 花に迷うて、ここに帰らず

自由闊達の幸せ 〇二二

4 そねむ心は自分より 以外のものは傷つけぬ

人に振り回されるな 〇二四

5 捨念清浄 しゃねんしょうじょう

捨ててしまえば 〇二六

6 荷風送香氣 荷風、香氣を送る

蓮の香りのように 〇二八

7 善悪の両者に汚されない

評価を求めない 〇三〇

8 本来美なるものはなく

美醜に固執しない 〇三二

9
五根五力
ごこんごりき

10
心外無法
しんげに法なし

11
錐尖の芥子 きりさきのけし

12 至誠に悖るなかりしか
しせいにもとるなかりしか

13
行けたらといつか思った

14 笑而不答 笑つて答えず

15 雨の日は雨を愛さう

16 心ノ奥ハ イツトナク ケガル

17 心一境性 しんいつきようしやう

18 秋冷窓紗を侵す
しゅうれいそうしやをおかす

19
七世代先
しちせだいさき

20 心如工画師 心はたくみななる画師のごとし

21 感情思想の洗練

22 為法来 求牀座 法のために来るや、牀座を求むるや

23
淨頗梨
じょうはり

○三四

自分を変化させる力

心の中の垣根とは

〇三六

自己の心を觀察する

〇三八

○四〇
「ものを知る」とは何か

今日ここにゐる理由

説明は万能か

〇四四

○四六
そのままを受け止めよ

殊勝な心の裏側

〇四八

○五〇 心を散漫にさせない方法

品性を養うには
〇五二

過去の上に現在がある

〇五四

○五六
色眼鏡で見ていないか

個性の尊重はいいが

〇五八

密やかな心の動き

自分はごまかせない

〇六二

生きる

- 24 現行熏種子 げんぎょうくんしゅうじ
25 還着於本人 かえつてもとの人につく

- 自己を形成するもの ○六四
毒は仕掛けた人に効く ○六六

- 26 堂々男子は死んでもよい
27 阿頼耶 あらや
28 無
29 廻り道
30 天鼓自鳴 天のつづみは自ずから鳴る
31 慎ましく食べ、慎んで喋る
32 願自在 がんじざい
33 一点の素心 一点のそしん
34 握拳はない にぎりこぶしはない
35 慈眼 じげん
36 行為による

- 心に誇れるものがあれば ○七〇
過去を背負って生きる ○七二
有ることは憂きこと ○七四
傷つき乱れた心を調える ○七六
自ずから行為しているか ○七八
慎ましかに生きたい ○八〇
地道が成功をつくる ○八二
心温かきことに出会う ○八四
真実一途な人が道を極める ○八六
第三の眼で見る ○八八
人間のよしあしとは ○九〇

37 迢々百尺楼 ちようちようたり百せきの楼

38 動止 どうし

39 遠くの遠くを

40 一日清間 いちにちせいかん

41 徳を養う

一段上がれば景色も変わる 〇九二

新しい情報もまた喧騒 〇九四

教養と社会性で豊かな人間に 〇九六

身の丈の生活を心掛ける 〇九八

他人に目がいつてしまう自分 一〇〇

人生よ

42 後の半截 のちのはんせつ

43 捨 しゃ

44 ひとまたぎの距離

45 掌の中の風 てのなかのかぜ

46 百年三万六千日

47 花は半開

48 花発多風雨 花ひらけば風雨多し

49 武火文火 つよびとろび

人生は後の半生で決まる 一〇四

取り込むばかりが能じゃない 一〇六

人はたやすく変化する 一〇八

望めば切りがない 一一〇

味わい深く生きるには 一二二

しみじみ味わう 一二四

明日はもう会えないとしたら 一二六

何事も火加減が大事 一二八

50 君看衣裏珠 君、えりの珠を看よ

51 長途一躡 ちようといつち

52 ひとりはいつも独り

53 霜葉紅 霜葉は紅なり

54 退いて見る

55 花還世上塵 花もまた世上の塵

56 紀路も伊勢路も遠からず

57 よどみに浮ぶうたかた

人と人

58 海の沈黙 地のざわめき 空の音楽

59 千手千眼 せんじゆせんげん

60 不障増上 ふしょうぞうじよう

61 少分一切 少分の一切

62 お静かに

隣の芝生は青いのか 一二〇

小さな失敗にとらわれない 一二二

たまには群れるのをやめる 一二四

人生の晩秋も紅葉のごとく 一二六

見落としたことに契機あり 一二八

比較することに意味があるか 一三〇

ただひたすらに歩めばいい 一三二

すべては変化の中にある 一三四

人の一面だけ見ていないか 一三八

人とどう交わればいいのか 一四〇

周囲の協力があつて自分がある 一四二

「すべて」と言い切れないもの 一四四

人を送り出す時の言葉 一四六

63 随意坐 意にしたがつてざす

64 不覺到君家 覚えす君が家に至る

65 音沙汰の途絶えて噂遠花火

66 山はひつそり

67 ことばのおほき

68 三輪清浄 さんりんしょうじょう

69 老若男女

70 依法不依人 法によりて人によらず

71 名香一裏 めいこういつか

72 合掌

73 平等の態度

いのちの根源

74 天覆地載 天は覆い地は載せる

75 あるがまま雑草として芽をふく

心を通わせられる仲とは 一四八

ほんとうの友とは何か 一五〇

人の縁とは微妙なもの 一五二

毀誉褒貶に惑わされない 一五四

お喋りもほどほどがよい 一五六

物のやりとりは心のやりとり 一五八

社会を構成するもの 一六〇

私たちは危ない存在なのだ 一六二

一筆認めることで届くもの 一六四

相手をたがいに認め合う 一六六

つねに同じ心持ちで臨む 一六八

大いなる自然の中に生きる 一七二

ただただあるがままに 一七四

76 携手撫風光 手をたずさえて風光をぶす

77 大和 大いなる和

78 森は海の恋人

79 衆生 しゅじょう

80 生死 しょうじ

81 八百万の神 やおろすのかみ

82 自然に仕える

83 仏も吾もなかりけり

84 山川不与俱老 さんせん、人とともに老いず

85 目にはさやかに見えねども

86 魂は暗がりに宿る

87 旅の途中

88 自然は自己のひろがり

自然の中の人間として 一七六

ともに多様性を尊重する 一七八

すべてはつながっている 一八〇

いのちあるものすべて 一八二

生と死は対立しない 一八四

それぞれに価値がある 一八六

人は自然の一員にすぎない 一八八

ボーダーレスの世界 一九〇

悠々たる天地の間で 一九二

自然に寄り添う感覚 一九四

芯のしんからの潤いを 一九六

すべてはみな、旅の途中 一九八

自然と人間は別物ではない 二〇〇

89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99

みちおほち

しんじつ一人として雨を観るひとり

大きな真実は大きな沈黙をもっている

満窓涼気分与君 満窓の涼気、君に分与せん

心遠地自偏 心遠ければ、地、自ずから偏なり

山静似太古 山静かにして太古に似たり

除夜ノ鐘ノ音 幾ツヲ聞ヒテ

天地衾枕 天地はきんちんなり

沈黙によつて魂を洗う

涼風が立つ

はたもだせるか

無限空間の中の自分

自己と真正面から向き合う

言葉を越えた世界への誘い

私たちは、持ち過ぎである

町なかでも町はずれ

喧騒の後に静寂を

静かに一年を閉じる

天と地との間に在る

喧騒と饒舌の時代こそ

成熟した言葉遣いによる広がり

沈黙の意味とは何か

二〇四

二〇六

二〇八

二一〇

二一二

二一四

二一六

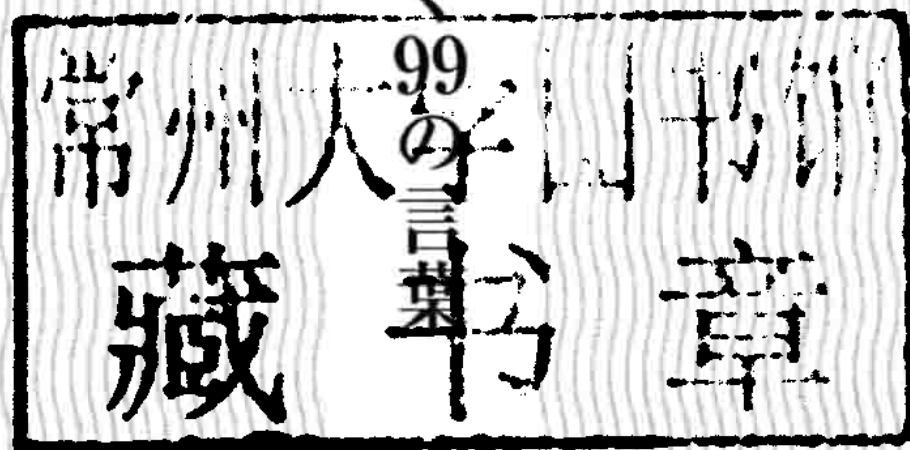
二一八

二二〇

二二二

二二四

心に響く



多川俊映

学研M文庫

はじめに

心理学を学んでいた学生時代、フランスの教育家アランの「樂觀主義は意志で、悲觀主義は気分である」という言葉を学んだ。

最初は、アランの著作そのものからではなく、誰だったか高名な教授のエッセーが何かで知ったのかもしれない。そのあたりの記憶はもはや朦朧としているが、いずれにせよ、これを読んだ瞬間、それまでの青年特有の何かモヤモヤした気持ち、たちまち雲散霧消——。そのことは、いまでも鮮明に覚えている。

しかし、それにしても、この言葉は、真理というか真実というか、その核心をズバリ言い当てている。真理・真実はダラダラと述べられるのではなく、このように、凝縮された言葉によってこそ示されるものらしい。とは後でわかったことだが、そのときはともかくも、——そうか、樂觀主義は積極

的で堅固な意志と直結しており、一方、悲観主義は要するに消極的な気分なんだ。と、どちらかといえば沈みがちな質だった私も、大いに高揚したのだった。

言葉にこもる力というものを知った瞬間といえるが、私を励ますもう一つの言葉は、能「船弁慶」の子方（義経）が謡う「そのとき義経すこしも騒がず」だった。いくつもの難題が同時に押し寄せてきた時など、この詞章がふと口をついて出て、何度パニックをやりすごしたかわからない――。

ところで、「幽明界を異にする」というが、その幽界と顕界の相異点の一つは、まさに言葉の有無であろう。死者はもとより沈黙の人で、言いたいこともいえない。が同時に、生前のように言葉によって揺さぶられ、心が泡立つこともない。

人気ミステリー作家のパトリシア・コーンウェルは一九九三年、テネシー大学にある死体の経過状況などを研究する施設(The Body Farm)を視察し、翌年同名の長編を発表したが、そこで「……もはや言葉に傷つく者はここにいない」と書いた（相原真理子・訳『死体農場』）。

これを裏返せば、生きるということとは、それだけ言葉の暴力に傷つけられもするということに他ならない。言葉によって励まされるが、言葉によって意気消沈させられもする。そして、行きずりのなにげない言葉に自分なりの意味を見出し、それをたよりに困難な人生を歩いてもいけるのだ。アランの言葉に学んだ経験から、その後、心引かれる言葉に出会えば、それを書きとめ、そして、気がむけば、それに自分なりのコメントを走り書きしたりした。そんなメモ書きの中から、とくに東洋（インド・中国・日本）に限って選り出した言葉の数々が、本書の内容である。

これら99の言葉は、週刊ダイヤモンド誌に二〇〇五年四月から二〇〇七年三月までの二年間、「東洋の風韻」と題して連載したものである。著者の立場は仏教だが、週刊経済誌という性格を考慮して広く言葉を選び、かつ、520字のコメントも一読、たちまち了解できるよう心がけたつもりである。

——昨今、私たちの社会は、一国の総理から若造のボクサーにいたるまで、言葉があまりにも軽い。「命を賭して」などというから、これは壮絶なこと

になる、と思っていたら、それつきりだつたりする。本来、言葉と心はつながっているはずであるが、こんにちただいま、それがあまりにもバラバラである。本書がもし、その修整にもなればどうか役立つのであれば、こんなうれしいことはない。

二〇〇八年五月

多川俊映

付記

単行本初版から五年が経って、このたび学研M文庫に入ることになった。ここに取り上げている言葉は皆、古くて新しいもの——。死語なぞにしたくないから、今後とも読み継がれていくならば幸いである。学研パブリッシングの増田秀光さんにお世話になり、また、装丁は単行本に引き続き、鈴木成一さんをお願いした。感謝申し上げます。

二〇一三年五月

